
サンタなんていない

オオハタ ユウキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンタなんていない

【Nコード】

N1699H

【作者名】

オオハタ ユウキ

【あらすじ】

クリスマス。誰かと過ごす予定の無い僕は、友人に誘われるままケーキ売りのバイトを手伝った。そこで出会ったとある親子に、昔の記憶がよみがえる。

十二月に入った途端、街はクリスマス一色になり、仲むつまじいカップルたちが他人に見せ付けるように体を寄り添う。僕はジャンパーを羽織り、一人寂しく街を歩いていて。途中コンビニの前で足を止め、煙草に火をつける。煙草の煙か吐息かわからない白い靄が口から絶え間なく吐き出される。することがない。僕が通う大学ももう冬休みに入ってしまったので、暇を潰すことも出来ず、毎日ただ無駄に過ごしていた。

突然、携帯が鳴り出した。僕は煙草を口にくわえながら携帯を取り出した。

「もしもし」

相手は大学の友人である田中だった。

「どうした？」

「お前どうせ暇してんだろ？ ちょっと店手伝ってくれないか？」

田中の実家はケーキ屋を営んでいる。そうか、今月はケーキが売れる時期だったな。売り子をやれということが。

「いいけど、二十四日でいいんだろ？」

「お前、今日何日か知ってるのか？ 今日が二十四日、クリスマスイブだぞ？」

「ああ、そうだった」

そうか。今日がクリスマスイブだったんだ。まあ僕には関係の無い話だ。別にバイトで暇が潰せるのならそれでいい。

「親戚の姉ちゃんに手伝ってもらってるんだけどさ、まだ人手が足りず困ってたんだよ。サンタの服着てもらうけどいいだろ？」

「おう。じゃあ今から行くわ」

携帯を切り、田中の家に向かって歩き出した。親戚の姉ちゃんか。同じようにサンタのコスプレしているのだろうか。少し、いやかなり気になるな。あわよくば明日二人で過ごすことになるかもしれないな。

いし。金も入るし。

店の前で田中がサンタの格好をしてケーキを売っていた。街の真ん中に位置する店だけあって、客に埋め尽くされていた。田中は僕の姿を見つけるなり、店の中へ僕を連れて行き、サンタの衣装を手渡してきた。

「悪いな、4、5時間でいいからさ」

「それより親戚の姉ちゃんは？」

さりげなく聞いたつもりだったが、田中はニヤリと笑うと煙草に火をつけた。

「残念でした。彼氏とデートだつてさ。さつき帰ったよ」

まんまとしてやられたわけか。まあいい。僕はサンタの衣装を身にまとい、田中と一緒に外へ出た。

「ほら！ やっぱりサンタさんは居たんだよ！」

少し離れたところから子供の声が聞こえてきた。僕のほうを指さしながら叫んでいる。小さな男の子だった。つぎはぎだらけの服を着込んでいる。サイズの合っていないズボンとぼろぼろになった靴。いまどき居るんだな。そういう子供も。

「あれはサンタじゃありません！ サンタなんてこの世に居ないんだから」

プレゼントを買う金が無いから居ないとうそをつく。懐かしいな。もう10年以上前になる。

僕には父が居なかった。小さなときに離婚し、僕は母に付いていた。母は朝から晩まで働いていたが、今日の飯をどうするかというぐらい貧乏だった。クリスマスは二人で親戚の家に行つて一緒にやらせてもらっていた。もちろんプレゼントなんて無い。母は悲しそうな顔で「サンタなんていない」と口癖のように言っていた。

ケーキが買える家と買えない家。サンタが来ない家と来る家。小さいながら僕は自分の不幸を呪っていた。友達や親戚は豪華な食事を食べ、サンタがくれたプレゼントで遊んでいた。クリスマスに思

い出なんか無い。友達をうらやましく思った。それだけ。

僕は手が止まっているのに気づき、また仕事を再開した。4、5時間で終わるといふ約束だったが、客足が遠のく頃にはもう夜になっていた。雪がちらちらと降りだした。周りの家には明かりが付き、街にはクリスマスソングが流れ出す。大きな木は飾り付けがされ、片付けている僕の横をカップルや家族が通り過ぎていく。ふと目の前に人の気配を感じた。あの親子が僕を眺めている。ケーキを買いおうか迷っているのだろう。財布を片手に持ったまま立ちすくんでいる。もう大きいケーキしか残っていない。小さなケーキは売切れてしまっている。親子が近づいてきた。

「すみません……、一番小さいケーキはまだありますか？」

「もう売り切れてしまって。大きいサイズのなら残っていますけど……」

「そうですか。すみません、また来ます」

母親は、ケーキと僕を見つめ続ける男の子の手を無理やり引つ張りながら、夜の街へと消えていった。あの二人にとっては、雪もクリスマスソングもツリーも余計なものなのだろう。この二日間が苦痛でたまらないだろう。僕もそうだった。この歳になってもそれは消えることは無い。

僕は財布を取り出し、帰る準備をしている田中に金を渡し、ケーキを箱に入れた。僕の姿を見つけた田中が、近づいてきた。

「お疲れ。サンタの服は店の中にも置いておいてくれ」

「悪い、ちよつとこの服借りるわ」

僕はケーキを手に持ち、あの親子を追いかけた。クリスマスが嫌いなのは僕だけでいい。サンタクロースは存在する。楽しいクリスマスを。

(後書き)

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1699h/>

サンタなんていない

2010年10月22日09時12分発行